九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

白石良夫著『虚学のすすめ基礎学の言い分』

https://doi.org/10.15017/4377924

出版情報：九大日文. 37, pp.99-102, 2021-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

白石良夫著
『虚学のすすめ　基礎学の言い分』

本家の「学問のすすめ」が、いかにも啓蒙の書にふさわしいストレートな響きを持つだけに、「虚学のすすめ」というタイトルは、いかにも表裏のありそうな皮肉なタイトルに見えるかも知れない。そのような印象こそ、「虚学」が本来の「虚学」として気息奄々となっていることの何よりの証左であろう。

「学問のすすめ」と同じように、「虚学のすすめ」も、本来はストレートで明朗な響きを湛える表現だったはずである。本書の想定される主たる読者である若い研究者や学生は、「虚学のすすめ」というタイトルに、どのようなイメージを持つだろうか。「基礎学の言い分」ともあるので、「基礎学」という地味な立場から、やや世を拗ねて、しょせん「虚学」と卑下すると見せかけつつ、武士は喰わねど高楊枝風に斜にかまえたタイトルと誤解する人も多い気がする。

さらに、本書の「まえがき」には、カール・セーガン『人はなぜエセ科学に騙されるのか』（青木薫訳）から次の一節がエピグラフとして引かれてもいるので、ますます、そのような複雑なポーズに見えかねない。

だまされやすい人たちを陥れるまがいものの説明は、そこらじゅうにころがっている。一方、懐疑的な説はなかなか人々の目に触れない。それというのも、懐疑的なものは〝売れない〟からだ。

十九世紀末に出た「学問のすすめ」は、実学の経典として、ともかくよく売れた。というより二十一世紀の現在も、マンガ版や電子版なども含め、かたちを変えて売れ続けている。だからこその「虚学のすすめ」というタイトルであろうと皮肉る読者もいるかも知れない。

しかし、著者が懐疑派に与するとしても、「虚学のすすめ」は、懐疑派一流の皮肉に由来するのではない。皮肉に感じる読者がもはや多数派（しかも圧倒的な多数派）であるとすれば、かつての「虚学」は、というより、その「虚学」の担い手は、もはや絶滅危惧種に近い。

「虚学のすすめ」は、本書の内容や文章がそうであるように、本来はストレートで明朗な響きを持つ。

「虚学」とは何か。虚実の語から察知されるように、実学に対する虚学であり、本書の表現を引けば、「学んだ知識が社会生活に直接役に立つ学問を、実学という。この伝でゆくなら、文学・哲学の研究などは、さしずめ「虚学」」ということになる。本書の別の表現を用いれば、実学という「即戦力になる学問」に対し、「即効薬」にはならない「地道な基礎研究」である。本書のトピックは、主に著者が専攻する「国文学」を中心とした人文基礎学であるが、「虚学」自体は、もとより文理を

問わない。

教科書調査官として長らく文部科学省に身を置いた著者が、「基礎学のすすめ」を説くのは、それが絶滅危惧種化しているという危機のためである。その詳細は、よろしく本書に拠られたいが、その証左は、くりかえし言うが、本書のタイトルの感じ方いかんにかかっている。おそらく、かつては「虚学のすすめ」と聞いて、皮肉などではなく、いかにも生真面目なこそばゆさを感じたのではなかったか。たとえば、池田安隆「「虚学の精神」再訪」（東京大学理学部ホームページ・理学エッセイ第19回）は、東大の安田講堂事件当時に文学部長だった堀米庸三が「季刊芸術」の「学問のすすめ」特集号（一九六九年七月）に寄稿した「虚学の精神――あるいは学問の没意味性について」に言及しながら次のように述べている。

> 虚学とは，実学の対極に位置する学問群の総称（=pure science）であり，理学や哲学，歴史学，地理学，人類学，宗教学等を志す研究者が自らの学問に誇りと自負とほんの少しの韜晦とをこめて使った呼称である。1969 年当時には説明無しで用いられていたこの言葉が，現在ではほとんど死語と化している。言葉が消えるということは，それに付随する概念が無くなることを意味する。過去20年間にめまぐるしい勢いでおこった「大学改革」は，安田講堂事件に端を発したといえるであろう。この間に虚学という概念が世の中から消えていったらしい。

著者が繰り返し語る危機は、文系だけのものではない。今に至る「大学改革」の発端に位置づけられた「安田講堂事件」の1969 年前後の大学とそこでの研究の空気は、本書の「第Ⅱ部文学青年から文学研究者へ」にも描かれている。「虚学」の語が、「自らの学問に誇りと自負とほんの少しの韜晦とをこめて使」われた時代の空気を十分に呼吸することで研究生活をスタートさせた著者にとって、「虚学」の消滅は、ほとんど空気の消滅に等しい。その空気の消滅が、真に危機的なのは、本書の著者や著者の世代の研究者にとってではない。著者たちの世代は、すでに、その空気を十分に呼吸してきたのだし、つまりは、その快楽を十分に堪能してきたのだし、以て瞑すべきであろう。

「虚学」の消滅が危機的なのは、真に危機的な状況が出現したとき、それに応じるための土壌が根絶やしにされているからである。本書の帯文に「学問は即効薬ではない。即効薬ではないが、それなくして即効薬はつくれない。」とあるのは、そうした危機の表現である。

コロナ感染症の世界的流行という真に危機的な状況が新たに出現したとき、あれほど「科学技術立国」を唱えていた日本において、「即効薬」を作るための豊かな土壌は培われていたのだろうか。「即効薬」的に機能する社会的なシステムを用意する知的資本の蓄積は十分にあったのだろうか。賛否にかかわらず、多くの大学で対面授業が困難な今こそ、「虚学のすすめ」に耳を傾ける格好の機会である。そしてあるいは最後の機会かも知れない。オンラインでの情報交換のスタイルが一般化して

しまえば、教師と生徒が、あるいは研究者同士が、同じ場所で、同じ資料の空気を呼吸しながら血肉化される「虚学」の実践からは遠ざかる。「虚学」の血肉が、謦咳に接する体験の愉楽と継続と更新の蓄積にあることは、以下の目次からも推測されよう。

まえがき

第Ⅰ部　むなしい学問なのか

虚学の論理

文学部の光景　滅びるか、インド哲学　不変の社会的評価

約束されない「虚学」の未来　学問は即効薬ではない　本当に虚しい学問か　蓄積こそが学問である　開かれた大学とは何か　それから二十年以上を経て

ノーベル賞と旧石器

だれも気づかない共通点　文系・理系を問わない問題　専門家の悲痛な声　学者でない人間に学者の良心を責めてどうするんだ　石器捏造と基礎学軽視、どっちの罪が重い？

雨後の筍が日本を救うか　それから二十年

「勇気をもて。学者の良心を忘れたのか」

霧の撤収作戦　「学者の言うことを信じよう」　武人の激励　「学者の良心を忘れたのか」

共和国は学者を必要としていない

レーニンを永久保存した男　ロシア革命の場合　フランス革命の場合　文化大革命の場合　そして、日本の大学改革の場合

人文学のプリンシプルを忘れるな

研究者は強迫観念を持て　論文集出版の意味　新書本では業績にならないか　グロータース神父の挑発　人文学の戦略　人文学には人文学のフォーマットがあるはず

大学図書館は本を貸し出すな

図書館は貸本屋ではない　貸出件数という亡霊　手をのばせばそこに本がある　地方国立大学の附属図書館をめぐる惨状　先人達の遺産が泣いている　いまこそハコモノ行政の出番　知のリージョナルセンターが聞いてあきれる　学生サービスを放棄した大学

第Ⅱ部　文学青年から文学研究者へ

文学部への道

大学は解体されなかった　国立二期校の風景　文学・歴史のほうに進め　見えなかった文学部という選択肢　遅すぎる反抗期

文芸部部室と無邪気な夢

バスから見た六本松キャンパス　文芸部入部　ファントム　墜落と政治の季節　小説の季節のなかで　季節の移ろい

作家への憧れ　停止した時間　「春が来て夏が来て秋が来て」　慌ただしい六本松との別れ　「カインとアベルの息子たち」　だれもいない文芸部部室　彷徨のなかで　文学青年との訣別

中野三敏先生と和本修業

和本との邂逅　靴下の片一方を捜して　おさらば文学青年
今井源衛先生と『学海日録』刊行始末
学海遺著・旧蔵書の行方　妾宅日記の発見　本宅日記とその研究会　文壇史登場以前の依田学海　附新潮文庫収録にあたって
非の打ち所のない先行研究の功罪
厳密な分類の索引は必要か　学際の境界は厳密であるべし
蔵書目録は大雑把であれ　「帝国図書館蔵書目録」の使い勝手　『新編帝国図書館和古書目録』余談　大雑把な先行研究に導かれて　「先行研究」にまつわる誤解
第Ⅲ部　国文学ひとりごと
作者は本当のことを書かない
国語教科書の注釈　当たり前の事実に注釈は必要か　作者は嘘をつかないという幻想　韃靼海峡を渡ったてふてふ
二人のタケウチ氏をめぐる因縁譚
四国の厳しい一読者　二人のタケウチ氏　奇しき縁
資料を読み解く面白さ
江戸藩邸とは　歴史資料としての手紙と日記　日記はことの詳細を記述しない　印旛沼開発一件の駆け引き　維新後に伏せられた事実　戊辰戦争と佐倉藩の一挿話　新たな発見をして
語る〈時間〉、語られる〈時間〉
小津映画の生理的安定　「東京物語」は東京を語ったわけではない　東京と尾道の距離　〈時間〉の仕掛け　語る〈時間〉、語られる〈時間〉　紀子の〈時間〉　映画は残されたものの現実をえがかなかった　喪服をめぐる挿話　若い京子の目　紀子の告白、残酷な〈時間〉
資料の提供か、成果の発信か
オカルトは滅びない　江戸に出掛けて江戸人の話を聞け
アマの注釈、プロの注釈　研究資料の提供か　研究成果の発信か　白か黒かではない
あとがき

（二〇二一年二月　株式会社文学通信　二〇五頁　一九〇〇円＋税）